

外用痔疾用薬

製品群No. 30

ワークシートNo.23

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用	C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)	H スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果		
評価の視点	薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与(投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)			スイッチ化等に伴う使用環境の変化	
		併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの						薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	使用量に上限があるもの		過量使用・誤使用のおそれ
局所麻酔成分	アミノ安息香酸エチル 軟膏はあるが、ここでは痔疾用薬であるのでアネステジン「ホエイ」内服で代用	局所麻酔薬であり、痛感温度感覚を制御して作用を発現する。						・本剤に対し過敏症の既往歴 ・乳幼児(メトヘモグロビン血症をおこすおそれ)	高齢者、妊婦又は好娠している可能性のある婦人				長期連続投与は避ける。	通常、成人にはアミノ安息香酸エチルとして、1日0.6～1gを3回に分割経口投与する。 なお、年齢、症状により適宜増減する。 高齢者では減量するなど注意すること。	下配疾患に伴う疼痛・嘔吐 胃炎、胃潰瘍

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果
		併用禁忌(他剤との併用に より重大な問題 が発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの				薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用量に上 限があるもの			
局所 麻酔 成分	塩酸ジブカイン注 表面麻酔に 類似のため 使用	感覚・求心神 経繊維のNa <sup>+</sup> チャンネルを遮 断することによ り局所麻酔作 用を発現する。 効力、持続性、 毒性いずれも最 大級の局所麻酔 薬であるが、よ り効力を強める ために局所鎮痛 以外の目的には エピネフリンを 添加して用いる			振戦、痙攣等 の中毒症状 (頻度不明)	ショック(頻度 不明)	頻度不明(眼 気、不安、興奮、 霧視、眩暈、悪 心・嘔吐等)	頻度不明(過 敏症)	本剤に対し過敏 症の既往歴	本人又は両親、 兄弟に気管支喘 息、発疹、蕁麻疹 等のアレルギー 反応を起こしや すい体質、高齢 者、妊婦又は妊 娠している可能 性のある婦人。						<p>使用に際し、目的濃度の水性注射液または水性液として使用する。</p> <p>ただし、年齢、麻酔領域、部位、組織、症状、体質により適宜増減する。</p> <p>仙骨麻酔 0.05～0.1%注射液にエピネフリンを添加したものを 用い、塩酸ジブカインとして、通常成人10～30mg を使用する。</p> <p>伝達麻酔 (基準最高用量：1回 40mg) 0.05～0.1%注射液にエピネフリンを添加したものを 用い、塩酸ジブカインとして、通常成人3～40mgを 使用する。</p> <p>浸潤麻酔 (基準最高用量：1回 40mg) 0.05～0.1%注射液にエピネフリンを添加したものを 用い、塩酸ジブカインとして、通常成人1～40mgを 使用する。</p> <p>表面麻酔 ・耳鼻咽喉科領域の粘膜麻酔には、1～2%液にエ ピネフリンを添加したものを 用い、噴霧または塗布 する。</p> <p>・眼科領域の麻酔には、 0.05～0.1%液にエピネフ リンを添加したものを 用い、通常成人には1～ 5滴を点眼する。</p> <p>・尿道粘膜麻酔には、 0.1%液にエピネフリン を添加したものを 用い、通常成人男子 10～20mg、女子3～ 7mgを使用する。</p> <p>・膀胱粘膜麻酔には、 0.025～0.05%液に エピネフリンを添加 したものを 用い、塩酸ジブカイン として、通常成人 10～20mgを使用 する。</p> <p>・局所鎮痛には、0.025～ 0.05%液を用い、適 量を使用する。</p> <p>歯科領域麻酔 0.1%注射液にエ ピネフリンを添加 したものを 用い、伝達麻酔・ 浸潤麻酔には 塩酸ジブカイン として、通常成人 1～2mgを使用す る。</p>

外用痔疾用薬

製品群No. 30

ワークシートNo.23

リスクの程度 の評価	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		D 蓋用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	用法用量	効能効果	
評価の視点	薬理作用		相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		薬理に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそ れ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)			スイッチ化 等に伴う使 用環境の変 化			
			併用禁忌(他 剤との併用 により重大な 問題が発生す るおそれ)	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの						使用量に上 限があるもの	過量使用・誤使 用のおそれ	長期使用に よる健康被 害のおそれ				
局所 麻酔 成分	塩酸プロカイ ン注「ホエイ」 局所麻酔に 類似のため 使用	合成局所麻 酔薬の原型 であり、感覚 ・求心神経線 維のNa <sup>+</sup> チャ ネルを遮断 し、活動電位 の伝導を抑制 することにより 局所麻酔作用 を発現する。粘 膜への浸透性が 悪いので表面麻 酔としては無効 である。代謝産 物が血管拡張作 用を有し、速や かに吸収される のでエピネフリン の添加が必要である。			振せん、痺れ ん等の中毒 症状(頻度不 明)	ショック(頻度 不明)	頻度不明(ね むけ、不安、 興奮、霧視、 めまい、悪 心・嘔吐、メ トヘモグロビン 血症)		頻度不明(過 敏症)		重篤な出血や ショック状態(脊 椎、硬膜外麻酔 時：症状が悪化)、 注射部位またはそ の周辺に炎症(脊 椎、硬膜外麻酔 時：効果が急激に 発現)、敗血症の 患者(脊椎、硬膜 外麻酔時：敗血症 性の髄膜炎がおこ るおそれ)、メトヘ モグロビン血症(脊 椎麻酔を除く) (症状が悪化する おそれ)、本剤また は安息香酸エステ ル(コカインを除く) 系局所麻酔薬に 対し過敏症の既往 歴	高齢者、妊婦また は妊娠している可 能性のある婦人、 妊娠末期の婦人							使用に際し、目的濃度の 水性注射液として使用する。 脊椎麻酔(腰椎麻酔) 5～10%注射液とし、通 常、成人には塩酸プロカイ ンとして、低位麻酔には50 ～100mg、高位麻酔には 150～200mgを使用する。 硬膜外麻酔 (基準最高用量：1回 600mg)1.5～2%注射液と し、通常、成人には塩酸プロ カインとして、200～ 400mgを使用する。 伝達麻酔 1～2%注射液とし、通 常、成人には塩酸プロカイ ンとして、10～400mgを 使用する。 まろ麻酔 (基準最高用量：1回 1,000mg)0.25～0.5%注射 液とし、通常、成人には塩 酸プロカインとして、1回 1,000mgの範囲内で使用 する。歯科領域麻酔 2%注射液にエピネフリン を添加したものをを用い、 伝達麻酔、浸潤麻酔に は、通常、成人には塩酸プロ カインとして、10～100mg を使用する。 ただし、年齢、麻酔領域、 部位、組織、症状、体質に より適宜増減する。 必要に応じエピネフリン (通常濃度1:10万～20万) を添加して使用する。	脊椎麻酔(腰 椎麻酔)、硬 膜外麻酔、 伝達麻酔、 浸潤麻酔、 歯科領域 麻酔、局所 麻酔
リドカイン	キシロカイン 液「4%」 表面麻酔に 類似のため 使用	神経膜のナ トリウムチャ ネルをブロック し、神経にお ける活動電位 の伝導を可 逆的に抑制 し、知覚神経 及び運動神経 を遮断する 局所麻酔薬 である。表 面・浸潤・伝 達麻酔効果 は、塩酸プロ カインよりも 強く、作用持 続時間は塩 酸プロカイン よりも長い。			意識障害、振 戦、痙攣(頻 度不明)	ショック(頻度 不明)	頻度不明(眼 気、不安、興 奮、霧視、眩 暈、悪心・嘔 吐)	頻度不明(過 敏症)		本剤の成分又はア ミト型局所麻酔薬 に対し過敏症の既 往歴。	高齢者又は全身状 態が不良。心刺激 伝導障害。重症の 肝機能障害又は腎 機能障害。幼児。 妊婦又は妊娠して いる可能性のある 婦人。							塩酸リドカインとして、通常 成人では80～200mg(2～ 5ml)を使用する。 なお、年齢、麻酔領域、部 位、組織、体質により適宜 増減する。 幼児(特に3歳以下)では 低用量から投与を開始。	表面麻酔	

外用痔疾用薬

製品群No. 30

ワークシートNo.23

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	D 怒用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果
		薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ				薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)			
評価の視点		併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの					使用量に上限があるもの	適量使用・誤使用のおそれ	長期使用による健康被害のおそれ		
抗炎症成分	塩化リゾチーム	レフトーゼ錠	抗炎症作用、癬癢形成・組織修復作用、膿粘液の分解と排出作用、出血抑制作用						本剤の成分過敏症の既往歴、卵白アレルギー(アナフィラキシー・ショックを含む過敏症状)	アトピー性皮膚炎、気管支喘息、薬剤アレルギー、食物アレルギー等のアレルギー性素因、両親、兄弟等がアレルギー症状の既往歴、高齢者				作用機序は解明されていない点も多く、用量・効果の関係も必ずしも明らかでないで、漫然と投与しない。	1.慢性副鼻腔炎の腫脹の緩解、痰の切れが悪く、喀出回数が多い気管支炎、気管支喘息、気管支拡張症の喀痰喀出困難、小手術時の術中術後出血の場合、通常、成人は1日塩化リゾチームとして、60～270mg(力価)を3回に分けて経口投与する。2.歯槽膿漏症(炎症型)腫脹の緩解の場合、通常、成人は1日塩化リゾチームとして、180～270mg(力価)を3回に分けて経口投与する。高齢者減量	1.慢性副鼻腔炎の腫脹の緩解、痰の切れが悪く、喀出回数が多い気管支炎、気管支喘息、気管支拡張症の喀痰喀出困難、小手術時の術中術後出血(歯科、泌尿器科領域)の場合
グリチルリチン酸	軟膏のみなので、グリチルリチン酸モノアンモニウム(グリチロン注一号)を使用		抗炎症作用	ループ利尿剤・チアミド系およびその類似降圧利尿剤(低カリウム血症)、甘草(偽アルドステロン症)	偽アルドステロン症(頻度不明)、横紋筋融解症(グリチルリチン酸または甘草を含有する製剤)				偽アルドステロン症、ミオパシー、低カリウム血症(低カリウム血症、高血圧症等を悪化)	高齢者、妊婦小児等			長期運用により偽アルドステロン症	グリチルリチンとして、通常成人1日1回40mgを皮下注射する。なお、年齢、症状により適宜増減する。	薬疹	

外用痔疾用薬

製品群No. 30

ワークシートNo.23

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用	C 重篤な副作用のおそれ	C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)	H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	用法用量	効能効果	
評価の視点	薬理作用	相互作用	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	濫用に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそ れ)	症状の悪化 につながるおそ れ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	スイッチ化 等に伴う使用 環境の変化	
		併用禁忌(他 剤との併用) により重大な問 題が発生する おそれ	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの			使用量に上 限があるもの	適量使用・誤使 用のおそれ	長期使用に よる健康被 害のおそれ
抗炎症成分	コトリン錠 外用痔疾用 薬なのでヒド ロコルチゾン の内服で代 用	抗炎症・抗ア レルギー作用 を示す糖質副 腎皮質ホルモ ンである。副 腎摘出ラットの 肝に対する 本薬の糖原 増加作用はコ ルチゾンの約 1.5倍であり、 ラット綿球肉 芽腫に対する 抗炎症作用 はコルチゾン の約1.3倍で ある。 ヒドロコルチ ゾンの糖質副 腎皮質ホルモ ンとしての作 用は弱く、副 腎摘出イヌに 対する生命維 持作用はデ オキシコルチ コステロンの 約0.04倍である。	ハルビツール酸誘導体・フェ ニトイン・リファンピシ(代謝 が促進されることにより本剤 の作用が減弱)、サリチル酸 誘導体(これらの薬剤との併 用時に本剤を減量すると血 清中のサリチル酸誘導体の 濃度が増加し、サリチル酸中 毒)、抗凝血剤(これらの薬剤 の作用を減弱)、経口糖尿病 用剤(これらの薬剤の作用を 減弱)、利尿剤(カリウム保持 性利尿剤を除く)(低カリウム 血症)	頻度不明(月 経異常、経 炎、下痢、悪 心・嘔吐、胃 痛、胸やけ、 腹部膨満感、 口渇、食欲亢 進、精神変 調、うつ状 態、多幸症、 不眠、頭痛、 眩暈、痙攣、 筋肉痛、関節 痛、満月様顔 貌、野牛肩、 窒素負平衡、 脂肪肝、浮 腫、血圧上 昇、低カリウ ム性アルカ ローシス、中 心性漿液性 網脈絡膜症 等による網膜 障害、眼球突 出、白血球増 多、ざ瘡、多 毛、色素沈 着、皮下溢 血、紫斑、線 条、そう痒、 発汗異常、顔 面紅斑、創傷 治癒障害、皮 膚菲薄化・脆 弱化、脂肪織 炎、発熱、疲 労感、ステロ イド腎症、体 重増加、精子 数及びその 運動性の増 減)、神経障 害・抗体反応 の欠如(副腎 皮質ホルモン 剤を投与中 の患者にフ クテン(種痘 等)を接種し た場合)、小 児、発育抑 制、頭蓋内圧 亢進状態(長 期投与)、高 齢者・感染症 誘発、糖尿 病、骨粗鬆 症、高血圧 症、後のう白 内障、緑内障	頻度不明(過 敏症)	本剤の成分に対し 過敏症の既往歴 原則禁忌 有効な抗菌剤の存 在しない感染症、 全身的真菌症、結 核性疾患、単純泡 疹性角膜炎(感染 症を増悪させるお それ)、消化性潰瘍 (潰瘍を増悪させる おそれ)、精神病 (精神病を増悪さ せるおそれ)、後遺 白内障の患者(白 内障を増悪)、緑内 障(眼圧を上昇)、 高血圧(血圧を上 昇)、電解質異常 (低カリウム血症 等)、血栓症(血栓 症を増悪させるお それ)、最近行った 内臓の手術(創 傷治癒を障害させ るおそれ)、急性心 筋梗塞(心破裂)	感染症、糖尿病、 骨粗鬆症、腎不 全、うつ病、心不 全、甲状腺機能低 下、肝硬変、脂肪 肝、脂肪塞栓症、 重症筋無力症、高 齢者への長期投 与、妊婦又は妊娠 している可能性の ある婦人、授乳婦、 小児	水痘又は麻疹 の既往のない患者 においては、水 痘又は麻疹を 極力防ぐよう 常に十分な 配慮と観察を 行うこと。	適用後、投与を 急に中止すると、 ときに離脱症状 があらわれるこ とがあるので、 徐々に減量する など慎重に行な うこと。 高齢者への 長期投与：感 染症の誘発、 糖尿病、骨粗 鬆症、高血圧 症、後遺白内 障、緑内障等 の副作用発 現。 小児への長 期投与：頭蓋 内圧亢進症 状	通常、成人にはヒドロコル チゾンとして1日10～ 120mgを1～4回に分けて 経口投与する。 なお、年齢、症状により適 宜増減する。	1.慢性副腎皮 質機能不全 (原発性、続発 性、下垂体性、 原因性)、急性 副腎皮質機能 不全(副腎ク リーゼ)、副腎 性器症候群、 亜急性甲状腺 炎、甲状腺疾 患に伴う悪性 眼球突出症、 ACTH単独欠 損症 2.慢性関節リ ウマチ、若年 性関節リウマ チ(スチル病を 含む)、リウマ チ熱(リウマチ 性心炎を含む) 3.エリテマト ーシス(全身性 及び慢性円板 状)、全身性血 管炎(大動脈 炎症候群、結 節性動脈周囲 炎、多発性動 脈炎、ウェゲ ナ肉芽腫を含 む)、多発性筋 炎(皮膚筋 炎)、強皮症 4.ネフローゼ 及びネフロー ゼ症候群 5.気管支喘 息、薬剤その 他の化学物質 によるアレルギー ・中毒(薬 疹、中毒疹を 含む)、血清病 6.重症感染症 (化学療法と併 用する) 7.溶血性貧血 (免疫性又は 免疫性機序の 疑われるもの)、 白血病 (急性白血病、 慢性骨髄性白 血病の急性転 化、慢性リン パ性白血病)(皮 膚白血病を含 む)、顆粒球減 少症(本態性、 続発性)、紫斑 病(血小板減 少性及び血小 板非減少性)、 再生不良性貧 血	

外用痔疾用薬

製品群No. 30

ワークシートNo.23

リスクの程度 の評価	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果
	評価の視点	薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)				
			併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの						使用量に上限があるもの	過量使用・誤使用のおそれ	長期使用による健康被害のおそれ		
																		8.限局性腸炎、潰瘍性大腸炎 9.重症消耗性疾患の全身状態の改善(癌末期、スプルーを含む) 10.慢性肝炎(活動型、急性再燃型、胆汁うっ滞型)(但し、一般的治療に反応せず肝機能の著しい異常が持続する難治性のものに限る)、肝硬変(活動型、難治性腹水を伴うもの、胆汁うっ滞を伴うもの) 11.サルコイドーシス(但し、高側肺門リンパ節腫脹のみの場合を除く) 12.肺結核(粟粒結核、重症結核に限る)(抗結核剤と併用する)、結核性胸膜炎(抗結核剤と併用する)、結核性腹膜炎(抗結核剤と併用する)、結核性心臓炎(抗結核剤と併用する) 13.脳脊髄炎(脳炎、脊髄炎を含む)(但し、一次性脳炎の場合は頭蓋内圧亢進症状がみられ、かつ他剤で効果が不十分なときに短期間用いること)、末梢神経炎(ギランバレー症候群を含む)、筋強直症、多発性硬化症(視束脊髄炎を含む)、小舞蹈病、顔面神経麻痺、脊髄脚網膜炎 14.悪性リンパ腫(リンパ肉腫症、細胞肉腫症、ホジキン

外用痔疾用薬

製品群No. 30

ワークシートNo.23

リスクの程度 の評価	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果
	評価の視点	薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)			スイッチ化等に伴う使用環境の変化		
			併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの						使用量に上限があるもの	過量使用・誤使用のおそれ	長期使用による健康被害のおそれ			
																			病、皮膚細菌症、菌状息肉症)及び類似疾患(近縁疾患)、好酸性肉芽腫、乳癌の再発転移 15.特発性低血糖症 16.原因不明の発熱 17.副腎摘除、副腎皮質機能不全患者に対する外科的侵襲 18.蛇毒・昆虫毒(重症の虫さされを含む) 19.卵管整形術後の癒着防止 20.★湿疹・皮膚炎群(急性湿疹、亜急性湿疹、慢性湿疹、接触皮膚炎、貨幣状湿疹、自家感作性皮膚炎、アトピー皮膚炎、乳・幼・小児湿疹 21.内眼・視神経 22.急性・慢性中 23.難治性口内 ★印の附されて